



令和4年度アイサ事業報告書

アール・ブリュット
インフォメーション&
サポートセンター



はじめに

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター（略称：アイサ）は、2012年6月、社会福祉法人グロー内に開設しました。アイサでは、障害のある人の文化芸術活動に関わる相談支援活動や人材育成、ネットワークづくり、発表等の機会の創出、情報収集・発信などを行っています。

ここ数年の新型コロナウイルス感染症拡大により、活動や発表の機会が減少しているとの声が訪問調査や情報交換の場で聞かれました。オンラインを活用した機会や場を求める声がある一方で、実際に顔を合わせる集合型での機会を求める声も多く聞かれ、県内で芸術文化活動に取り組む人々のニーズは様々です。

また、日常的に芸術文化活動に触れる機会が多い都市部とは異なり、滋賀県のような地方においては、人が様々な芸術文化活動を日常的に体験し、人と人がつながる体験をする機会を積極的に作る必要があります。

今年度アイサでは、取り組みの中で参加者や関係者等の交流の機会をつくり、新たなネットワークが生まれ、次の活動や展開に発展していくこと、対象者を思い描いてそれぞれのニーズに丁寧に応える取り組みを行うことを目指して事業を計画しました。

本報告書は、アイサが今年度実施した事業について、目的や内容、振り返りを、取り組みごとにまとめています。

本報告書が障害者の芸術文化活動とその支援現場で役立てられることを願っています。

2023年3月

社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～
アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター

CONTENTS

もくじ

1	—	はじめに
2	—	もくじ
3	—	アイサの事業について
4	—	1. 芸術文化活動支援のためのプログラム「作品の魅力を生かす展示とは」
10	—	2. 出会いと学びのプログラム オンライン版
14	—	3. 第19回滋賀県施設・学校合同企画展 ing... ～障害のある人の進行形～
16	—	4. オンライン発表の場「あ～！いいっさ!!」
18	—	5. 創作ワークショップ「信楽の音を見つけよう」
20	—	6. 発表と交流の場「Super Super」
23	—	7. 障害者の芸術活動に関する訪問調査
24	—	8. 相談
25	—	9. 情報発信
26	—	10. 協力委員会
31	—	1年を終えて

●本文中の略語について

アイサ：アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター
 支援センター：滋賀県障害者芸術文化活動支援センター*
 NO-MA：ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
 ing 展：滋賀県施設・学校合同企画展 ing...～障害のある人の進行形～
 実行委員会：第19回滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

●本文中の表記について

障害福祉サービス事業所等の利用者について、利用者さん、ご利用者、利用者様等、様々な表現があるが本書では利用者に統一

*滋賀県障害者芸術文化活動支援センター

2017年から「障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚生労働省補助事業）が実施されています。地域で障害のある人が芸術文化を享受し、多様な活動ができるよう支援する体制を全国展開する事業です。アイサを運営する社会福祉法人グロー（GLOW）は滋賀県の障害者芸術文化活動支援センターを担っています。

アイサの事業について

アイサが行う事業には、相談、ネットワークづくり、発表の場づくり、研修会の開催、情報発信という5つの役割があります。それぞれの事業がどんな役割りを担っているのかを、各事業の最初のページに下記のアイコンで示しています。

5つのアイコン



相談 Consulting

作品や展覧会をつくること、発表、鑑賞などに関する相談支援を行っています。



ネットワークづくり Network

障害のある人、その家族、福祉関係者、芸術の専門家、地域の人びとなど分野や領域を超えたネットワークづくりに取り組んでいます。



発表の場づくり Presentation

障害のある人の美術や舞台表現等を発表する場づくりを行っています。



研修会の開催 Workshop

障害のある人の美術や舞台表現を支援する人、活動に関心のある人たちを対象に研修会を開催しています。



情報発信 Information

アイサのウェブサイト、研修会、作品公募、展覧会、発表会など障害のある人の表現活動に関する情報を発信しています。

ICONS

1.

芸術文化活動支援のためのプログラム 「作品の魅力を生かす展示とは」



目的

今年度は「芸術文化活動支援のためのプログラム『作品の魅力を生かす展示とは』」と称して全4回の研修を実施しました。作品の展示方法や展覧会の開催方法について学び、研修の成果としてボーダレス・アートミュージアムNO-MAでの作品展示を行いました。

この研修は、障害のある人の芸術活動を支援する人や関心のある人が本研修の学びを生かし、それぞれの事業所等での取り組みが充実することを目的としています。また、研修内でのグループワークを通して参加者同士のコミュニケーションの機会を創出することをねらいとしました。

開催概要

- 第1回 展覧会のプロセスを知ろう。**
日時 2022年10月3日(月) 13:30~16:30
- 第2回 広報や作品の展示方法について考えよう。**
日時 2022年10月25日(火) 13:30~16:30
会場 旧伴家住宅マントヴァ
ゲスト講師 有佐祐樹(グラフィックデザイナー)
- 第3回 作品を展示しよう。**
日時 2022年11月11日(金) 13:00~17:00
- 成果展示**
期間 2022年11月12日(土)~20日(日)
11:00~17:00 [月曜休館]
総入館者数 178名
出展者 あん/草薙陵太/佐々木卓也
MIKA/むーさん
- 第4回 研修で学んだことを共有しよう。**
日時 2022年11月21日(月) 10:00~12:00

会場 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA (第2回を除く)
講師 横井悠(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA学芸員)
参加者 8名



研修内容

● 第1回 展覧会のプロセスを知ろう。

NO-MA学芸員が、展覧会を開催する際に必要な過程と展示の基礎について、過去の展示事例を通して紹介。その後、展示する作品を鑑賞し感想を共有しました。また、チラシ作成についての基本的なレクチャーを受け、どのようなチラシデザインが良いか参加者同士で検討しました。研修の最後には作者・作品紹介テキストについて検討するグループワークを行い、各グループが考えたテキストを発表しました。



第1回：展示作品を鑑賞

● 第2回 展覧会の広報や作品の展示方法について考えよう。

グラフィックデザイナーの有佐祐樹さんを講師に迎え、展覧会の広報デザインについて検討しました。普段何気なく手に取っていたチラシのデザインを決めるまでにどのような過程があるかを学びました。展覧会チラシのイメージを参加者で話し合い、デザイナーに伝え、実際に参加者の意見が反映されたチラシを完成させました。後半はNO-MAのミニチュアを用いて、作品の展示方法について検討しました。展示方法について様々な意見が飛び交い、一つひとつの作品の魅力を生かす展示について考えました。



第2回：有佐さんによる講義

● 第3回 作品を展示しよう。

これまでの研修のなかで考えた展示プランを元に、平面・立体合わせ48点の作品を展示しました。平面作品を展示する際は、額装する、アクリルに挟んで壁面に展示する、天井から吊るすなど様々な方法での展示を学びました。慣れない作業に苦労する場面もありましたが、協力しながら進める様子が見られました。



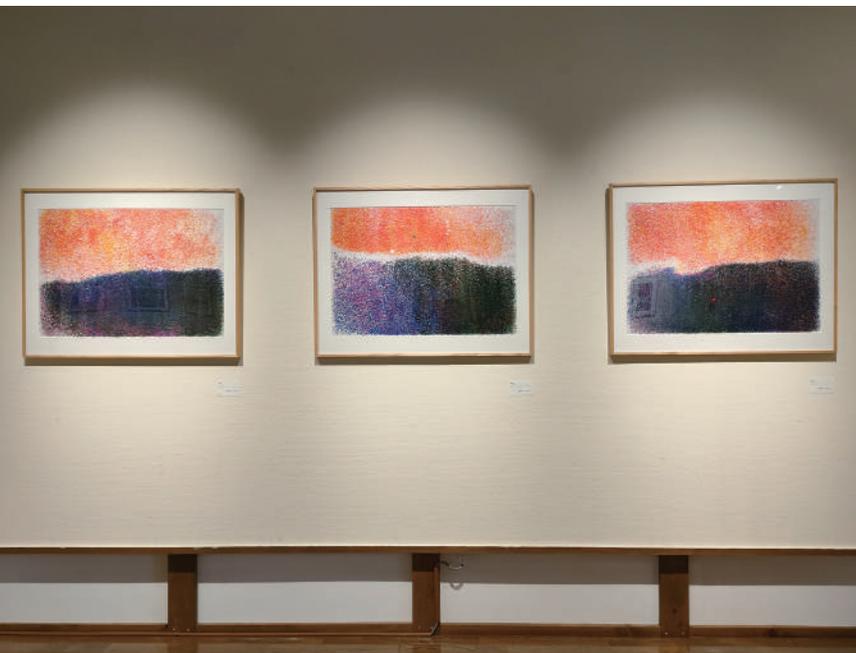
第3回：作品を展示する

● 第4回 研修で学んだことを共有しよう。

はじめに展示されている会場の鑑賞をし、今回の研修について振り返りながら感想を共有しました。展示の際に難しいと感じた点や工夫した点についても話し合いました。また、作品の撤収や、原状復帰までの過程も学びました。



第4回：展示会場での振り返り



voice

参加者のこえ

展示のプロセスを体験することを通して、実際の様子の流れをつかむことができた。座学だけでなく、参加者との意見交換を通じて展示にあたっての多角的な視点を獲得することに繋がった。展示に際して他者の視点を意識的に取り入れることが重要になるだろう。

展示方法によって鑑賞者に与える印象が変わる説明を受け、これからの展覧会でも違う視点で見ることができると思う。グループワークでは他のグループの発表を聞き、どのように考えるかヒントをもらうことができた。

大きな作品は額に入れるのにもとても大変と気付いた。目の高さに揃えるのも美術館に見に行くだけでは気付かない苦労があることがわかった。

毎回違う方とのグループになり、最初は少し不安があったが、研修終わりに近づくとチームワークを感じるようになり、有意義な研修だった。額装は慣れるまでに時間がかかった。アクリル板に挟んで展示する作品は数ミリ単位の調整で緊張した。

作品を鑑賞し、作品について語り合うことは楽しいと思った。実際に展覧会を一から作っていく楽しさがあると感じた。作品の背景などを知ることで、見え方も変化した。

展示方法の検討の際は実際にミニチュアを用いて話し合うことでイメージもふくらみ、想像しやすかったので参考にしたいと思った。

チラシのデザイン決定までをどのように進めていくのか、具体的に体験することができた。イメージを共有することで、伝えていくことがより鮮明になったと思う。展示方法もミニチュアを使用することで頭の中のイメージよりずっとわかりやすく、他の参加者の方とのイメージの共有もしやすかった。デザイナーさん、参加者同士、どちらもコミュニケーションを深めることでよりよい展示に繋がられるのだと感じた。



振り返り

今年は全4回の研修を企画しました。昨年度の研修は1日で講義を受け、展示を行いました。展覧会を開催する方法、広報について、作品の展示方法等、時間をかけて学ぶことが必要と考えたためです。障害のある人の支援をされている人や、障害のある人の芸術文化活動に興味のある人等、約10名が参加されました。最初は緊張の面持ちで参加されていた参加者も次第に打ち解け、回を重ねるごとにグループワークも盛り上がりを見せました。複数回の設定にしたことにより、学びを深め、参加者同士の繋がりも深まったように感じます。

本研修ではグループワークの時間を多く取り入れられました。チラシデザインや展示方法の検討、実際の展示に至るまで、参加者同士で意見を出し合い、相談しながら検討してきました。さらに実際に展示設営を体験することで、より深い学びに繋がったのではないかと思います。作風の異なる5名の作品をひとつの空間で展示するという点や、直接作者の意思を受け取っていない作品を展示するという部分に難しさを感じることもありましたが、コミュニケーションを密に取ることで、展示イメージの共有もでき、成果展示としての空間づくりができたのではないかと思います。参加者アンケートでも「参加者同士で意見を出し合うことで、自分では気

づくことのできない新しい視点や考え方に出会うことができた」「グループワークを通して他の参加者とのチームワークを感じる事ができた」というコメントがあり、研修の中でコミュニケーションを取ることが作品の魅力を生かすということに繋がったと考えます。

また本研修では、NO-MAの収蔵作品やアイサと関わりのあった作者の作品をお借りして展示することにしました。研修の成果展示を新たな発表の機会の創出に繋がりたいと考えたためです。実際に作品をお借りした作者の関係者からも「普段よりも作品が美しく感じました」「素敵に飾っていただき感謝と感動の気持ちでいっぱいです」「展示を見て楽しかったです」等、うれしいコメントをいただきました。

この研修は、展覧会の開催のための基本的な知識や技術を学び、参加者同士の交流を図るねらいをもって開催しました。この研修を通して得た学びが、参加者がそれぞれの場所で力を発揮できる後押しになれば嬉しいです。

これからもアイサでは、知識や技術を学ぶだけでなく、参加者同士の交流が生まれるような研修の企画をしていきます。

2.

出会いと学びのプログラム オンライン版



目的

アイサでは今年度オンライン研修「出会いと学びのプログラム」と称し、舞台芸術、美術活動支援、権利保護に分けて3回の研修を開催しました。この研修では障害のある人の芸術活動を支援する人や関心のある人が事例や学びから見識を広げ、それぞれの事業所等で学びを生かした障害者の芸術文化活動に取り組めるようになることを目指しました。

より多くの人に参加できるようにオンラインでの開催とし、期間限定でアーカイブ配信も行いました。



開催概要

第1回

「みんなでつくる“ぐるりまると劇場”プロジェクト」を語る

日時 2023年1月26日（木）17：00～18：30

講師 新井鷗子（横浜みなとみらいホール）
田中孝史（作業療法士・チームエンパワーメント）
岡司学（T & Tダンス教室）
竹岡寛文（デザイナー／株式会社タケコマイ）
西前悠（公益財団法人びわ湖芸術文化財団）
岳侑美希（能登川作業所）

第2回

美術活動支援について学ぶ

日時 2023年1月30日（月）14：00～15：30

講師 朝比奈益代（クラフト工房 La Mano）
島田和典（社会福祉法人やまびこ福祉会 創作ヴィレッジこるり村）

第3回

権利保護について学ぶ

日時 2023年2月15日（水）14：00～15：30

講師 後安美紀（障害とアートの相談室 [一般財団法人たんぼの家]）
岡部太郎（障害とアートの相談室 [一般財団法人たんぼの家]）
共催：一般財団法人たんぼの家

参加者 延べ70名

研修内容

● 第1回

「みんなでつくる“ぐるりまると劇場プロジェクト”」を語る

第1回は「みんなでつくる“ぐるりまると劇場”プロジェクト」に参加した6名を講師としてお招きし、座談会の形でプロジェクトについて語り合いました。

プロジェクトメンバーの田中孝史さんは、「プロジェクト会議の段階からみんなが肯定される場だと感じていた。人と人との交差点が生まれて、彦根に来て楽しめる場ができた」と新たなつながりを希望と捉えています。

江州音頭ワークショップのメンバーとして出演した岳侑美希さんは、参加のきっかけを「悲しい出来事があり落ち込んでいたので、元気を取り戻したかった」と言います。参加したことで「いろんな人と仲良くなって、しゃべったり踊ったりすると楽しいと気づいた。くよくよしている場合じゃないなど。自信ができました」と緊張しながらも、喜びを伝えてくれました。

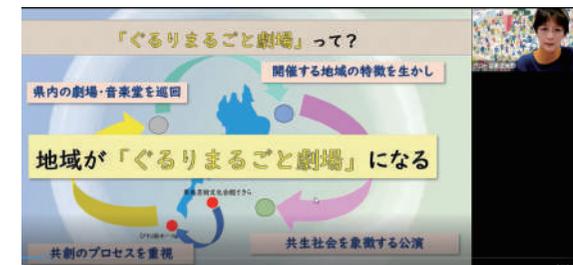
江州音頭に講師として参加した岡司学さんは、ダウン症の子どもたちのダンスチームとの交流を10年ほど続けています。「子どもたちとの交流を始めてから障害や福祉に対する関心が高まった。知ることは大切だと思う」と言います。

音楽祭当日に配布したパンフレットや、音楽祭の20年を描いた絵屏風のデザインを担当した竹岡寛文さんは、たくさんの関係者の語りを聞き、「表現の裏にはストーリーがあり、まとめるのは責任の重い仕事だった。説明しすぎず、伝えるための方法をイラストレーターとともに考えた」と思いや苦労について語りました。

文化芸術による共生社会づくりの取組を行っている「SANPOh」の西前悠さんは、「これまでの栗東から彦根に移り、これまでは参加できなかった団体が参加できるなど、新しい出会いがあったことは大きな一歩だ」と言います。

アドバイザーとして、プロジェクトを見守り、支えてくださった新井鷗子さんは、「関わった人たちの満足度が高く、気づきに満ちた大成功の音楽祭だった」と評価。今後は、「多様な表現の点と点を線でつないでいくことができれば、もっともっとよくなるのではないかと次に向けての期待を寄せてくれました。

関わったみなさんの充実感や達成感が画面を通し、受講者のみなさんにも伝わった研修となりました。



第2回 美術活動支援について学ぶ

第2回はクラフト工房 La Manoの 朝比奈益代さん、創作ヴィレッジこるり村の島田和典さんを講師に招き、福祉施設での美術活動支援の事例や大切にしていることについて話していただきました。

はじめに朝比奈さんに、クラフト工房 La Manoについて簡単に説明いただき、アトリエ活動が始まったきっかけと現在に至るまでの経緯を伺いました。

事例紹介では、織チームに所属し、週に1回アート活動に参加している人、アトリエメンバーで毎日アート活動に参加している人の事例を中心にその他のアトリエ活動に参加されている人の事例も交えながら、活動の様子についてお聞きしました。

少人数で活動していることを生かし、一人ひとりのやりたいことや方向性を見つけて活動されていることや、アトリエ活動に参加されている人の活動を通して生まれた変化や成長についてもお聞きすることができました。

さらに、継続するということが個性に繋がっていくと考え、長期的なスパンで見守ることを大切に

にされていることがわかりました。

島田さんからは、創作ヴィレッジこるり村設立の経緯から、創作活動で大切にしている3つのことを中心に、事例も交えながらお話いただきました。

特に、3つの大切にしていることとして、一人ひとりの本来の力が発揮できる「環境づくり」、支援者の常識に合わせてもらうのではなくそれぞれの常識を理解し、それぞれの正解を一緒に探す「個性の引き出し方」、直接的に人と関わることが苦手な人も作品を通して社会と向き合う機会を作り、支援者も作品が社会でどのように評価されるかという重要性を理解し、責任をもって「社会に発信する」という3つのポイントは、障害のある人の美術活動の支援をされている方にとっても大切な視点になるのではないかと感じました。

質疑応答の際には実際どのような画材や素材を用意しているか、自由に制作をするとは、特性に配慮した空間づくりについて気を付けていることは、といった具体的な質問が多く飛び交いました。



第3回 権利保護について学ぶ

第3回の研修では「障害とアートの相談室（一般財団法人たんぼぼの家）」の岡部太郎さん、後安美紀さんを講師に招き、芸術文化活動における権利保護について学びました。

「たんぼぼの家」は障害のある人の表現活動を社会に発信する市民団体で、日本初の障害のある人の総合的なアートセンター「たんぼぼの家アートセンター HANA」を運営されています。また、知財学習推進プロジェクトとして知的財産権について学ぶ研修会や書籍の出版等もされています。

「表現し、発信するという行為の裏には必ず権利が発生してくる」と話されていたように、権利保護は、芸術文化活動の中で切って離すことができない問題です。講義の中では「作品や商品を広め、作品や商品をつくる人の約束を守り、他の人の権利も守る」という知的財産権を学ぶ目的をわかりやすくお話いただき、理解することができました。

著作権と所有権との違い等、基本的な説明を受けた後、たんぼぼの家の知財学習推進プロジェクトで制作された冊子『身近な事例から学ぶ、知的財産50のQ&A』を活用し、「オリジナルそっくり

のアニメキャラクターの絵の作品を発表していいか」や「貸出中の作品のデジタルデータを商品化してもいいか」等、作品を発表したり広めたりする際に起こりがちないくつかの事例を紹介していただきました。併せて、障害のある人の新しい仕事や働き方を提案する「Good Job! プロジェクト」の中で商品化された「Good Dog 張り子」を例に挙げ、著作権や著作物の複製行為、デザイナーの意匠権など、商品化の過程で関係する様々な権利についても説明していただきました。

質疑応答の際には、実際に障害のある人の創作活動の支援をしている参加者から、作品の管理や保管、契約について等、具体的な質問がありました。ダンス、演劇など、舞台芸術における著作権についても日頃疑問に思っていたことにお答えいただき、幅広く学ぶ機会となりました。



3.

第19回滋賀県施設・学校合同企画展 ing… ～障害のある人の進行形～



目的

本展は、県内の障害福祉施設の支援員や特別支援学校の教員等と、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAとが実行委員会を組織し、企画から展示までを行う展覧会です。障害のある人の日々の生活に寄り添う支援者ならではの目線で、作者個人の表現や作品の魅力を引き出す展示を構成します。

障害のある人の日常から創造される作品を発表する機会を生み出すことや、造形活動を担当する支援員および教員の交流を図ることで、より質の高い支援を行えるようになるとともに、本展の取り組みを発信することによって、障害のある人の芸術活動への社会の関心を高めることを目的としています。

実行委員会実施概要

第1回	2022年6月22日(水)	実行委員の紹介、開催要項等の説明
第2回	2022年7月27日(水)	出展作品の鑑賞、各グループでの作品鑑賞・感想の共有
第3回	2022年8月24日(水)、25日(木)	各グループでの展示場所・展示内容の協議
第4回	2022年9月26日(月)、28日(水)	展示構成の協議
第5回	2022年10月28日(金)、11月2日(水)	展示構成の協議、チラシのデザイン案の共有
第6回	2022年11月18日(金)	図録原稿の確認、展示方法の共有
第7回	2023年3月7日(火)	開催報告、振り返り

展覧会開催概要

前期 2022年11月26日(土)～12月25日(日) 後期 2023年1月7日(土)～2月5日(日)
 会場 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 出展施設 [前期] あうとりーち和泉/あそしあ/アトリエアト/伊香立の杜 木輝/えがお近江学園/信楽青年寮/信楽学園/障害者支援事業所いきいき/慈円ステップアップ21/第二出会いの家/能登川作業所
 [後期] 愛育苑/きらり/湖南ダンスワークショップ実行委員会/さくらはうす滋賀自閉症研究会たんぼぼ/社会就労センターあおぞら/じょいなす第2ももスマイル/にっこり作業所/バンバン/ひのたに園/ふくらの森八日市養護学校
 協力施設 しあわせ作業所/彦根学園/瑞穂
 アドバイザー 野原健司(美術家)
 ギャラリートーク [前期] 2022年11月26日(土) 13:30～15:00
 [後期] 2023年1月7日(土) 13:30～15:00
 出展者 31名と2組
 総入館者数 848名



ギャラリートークの様子



振り返り

今年度は、県内福祉施設や特別支援学校等の29施設が参加し、31名と2組の作者による作品を紹介しました。展覧会に出展するのが初めての作者や施設もあり、障害のある人の作品の魅力を広く発信する機会となりました。

実行委員会では、作者の作品の魅力について話し、展示する場所や展示方法等の協議を重ね、ともに展覧会を作っていました。ing展は、障害のある人の作品を発表するだけでなく、実行委員会で展覧会を作るプロセスを学び、支援者同志のネットワークをつなぐ場にもなっています。

展示協議では、「こんなふうに展示をしたい」という委員や、「どのように展示するのがいいかわからない」という意見の委員もおられ、お互いの経験からいろいろな意見を交わしていきました。ing展のアドバイザーで美術家の野原健司さんや、NO-MA学芸員のアドバイスも踏まえながら、展示台の高さや額の色など、細部も含めて検討を重ねました。実際に展示するときには、イメージした図面を基にして作品の間隔や照明の位置、また同フロアの他作品との調和なども考慮し、展覧会を作りあげました。

委員からは「展覧会を作り上げる工程で、いろいろな配慮が必要であることを知りました」「他施設の展示方法や作品制作の過程などを知ることができ、勉強になりました」などの声が聞かれました。創作を通じた支援を深めるために、今後も支援員が集まり、共に学び話し合える機会が重要であると感じました。



4.

オンライン発表の場 「あ〜!いっさ!!」



目的

オンライン会議用ツールzoomを用いた発表と交流の場、「あ〜!いっさ!!」の取組は、今年度で3年目を迎えました。

「誰かに作品を見てほしい」という自発的なエネルギーが蓄えられたタイミングで生まれ、一人ひとりの小さなチャレンジを応援するこの企画、その舞台も小さいものです。何百人というお客様が入る大きな劇場や、不特定多数の人が訪れる展覧会といった場ではなく、発表者と参観者合わせて10人程、しかも画面越しに集まる、“ひっそりとした”発表と交流の場です。

コロナ禍で人が自由に行き来できない状況になり、何が生まれるのかははっきりとした見通しが持てるわけではなかった状況でのスタートでした。でも、小さいからこそ、オンラインだからこそ一つまり、“ひっそりとした”場だからこそ生まれる安心感が、発表者だけでなく参観者にもあると感じています。

その日集まった人の組合せによって、その時間の雰囲気も毎回異なることも魅力です。一人ひとりの存在が大きさ過ぎず、かと言って、もちろんなかったことにもされず。程よい距離でお互いが大事にされる。その具合がちょうどいいのかもしれない。

開催概要

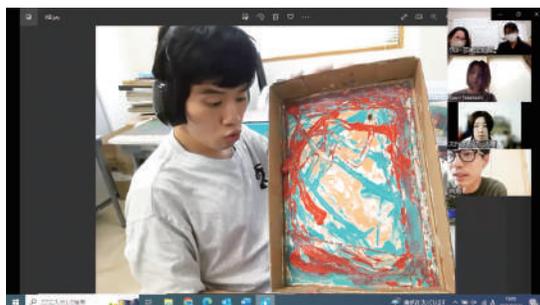
第1回	2022年8月20日(土)	10:00~11:00
第2回	2022年10月16日(日)	10:00~11:00
第3回	2022年12月17日(土)	10:00~11:00
第4回	2023年2月19日(日)	19:00~20:00

発表者 個人5名 団体6組
参観者 21名
(いずれも延べ人数)

● 第1回 8月20日(土)



花鈴人(かりんと):ハンドベル演奏



伊香立の杜 木輝:絵

● 第2回 10月16日(日)



福田悠星:歌



四季島ベガ:自作絵本フォトムービー



湖南ダンスカンパニー(蛍の里・男性チーム):ダンス



Dドラファミリー:楽器演奏

● 第3回 12月17日(土)



MIKA:絵、ピアノ演奏



湖南ダンスカンパニー(蛍の里・女性チーム):ダンス

● 第4回 2月19日(日)



Oh! Yah! 鼓 DON:和太鼓



きらきらスマイル:ダンス、楽器演奏

5.

創作ワークショップ 「信楽の音を見つけよう」



目的

今年度は、「信楽の音をみつけよう」と称したワークショップを企画・実施しました。

ざっくりとした質感と温かみのある色合いを生み、「奇跡の土」とも言われる信楽の陶土を用いた創作ワークショップと、信楽の土からできた陶器等を楽器として奏で、音と出会う演奏ワークショップの二本立て企画です。

土に触れ、音に出会い、また新たな音を生み出す。言葉ではない、音を通したつながりが人と人の間に生まれる。そんな出会いの機会になることを目的としています。

開催概要

開催日	2023年2月23日（木）
場所	滋賀県立陶芸の森 信楽産業展示館 創作室
内容	①「音との出会いのワークショップ」 講師：永田砂知子氏（打楽器奏者） ②「音を生み出すワークショップ」 講師：滋賀県立陶芸の森、世界にひとつの宝物づくり実行委員会
参加者	15名

その他のWS

今年度アイサでは、創作ワークショップの他、ダンスや和太鼓のワークショップを開催しました。

「踊りたい人集まれ！ ダンスワークショップ」

日時 3月5日（日）
場所 あいこうか市民ホール（甲賀市水口町）

「あなたもわたしもどんどこどん 和太鼓ワークショップin信楽」

日時 3月21日（火・祝）
場所 和太鼓音楽活動交流館（甲賀市信楽町）

実施内容

午前中は「音との出会いのワークショップ」。まずは講師の永田さんから、様々な“音”が紹介されました。目の前に並ぶのは、信楽の土でできた土鈴や世界各地の民族楽器などで、永田さんが奏でるそれぞれの音に、参加者の皆さんはじっと耳を澄ませます。その後、実際に楽器に触れて音を出し、叩く位置や力を入れ具合、楽器の下に敷くものの素材等で音が異なることを体感しました。「叩く人の身体のしなやかさによっても音が異なります」という話を聞いて、音の世界の奥深さに驚くばかりです。ワークショップの最後は気に入った楽器を手にとって思い思いに音を出してみる時間で、隣同士の人々の音と音が偶然に出会い、即興セッション的に重なり合う場面もありました。「何でも音楽になるんやなあ」というつぶやきも聞かれ、音の不思議と魅力を感じる時間はあっという間に過ぎました。

午後は、「音を生み出すワークショップ」。「世界にひとつの宝物づくり実行委員会」の宮本さんから作り方を聞いた後、活動がスタートしました。この日は、信楽の赤土と白色の透土2種類の粘土を使って、丸や筒状、鈴型など、音の出る（であろう）作品を作ります。ひんやりした土の感触を楽しみながら、のぼしたり丸めたり、音の出口に切込みを入れたりし、おしゃべりする間もないほどの集中ぶりで作業が続きました。同じ工程で作った作品ですが、一つひとつの作品には特徴と味わいがあり、その違いを魅力として受けとめてくれる「土」という素材の持つ可能性を感じます。

木々に囲まれた信楽の空間で、音や土に触れて時間を過ごし、ゆったりやさしい気持ちに導かれた一日となりました。

作品が焼きあがるのは約2カ月後。信楽の土からどんな味わいあふれる音が生まれるのか……楽しみにしながら、春を待ちたいと思います。



6.

発表と交流の場 「Super Super」



目的

県内で活動する音楽やダンス等の舞台芸術活動団体が、日頃の成果を発表する場として「Super Super」を企画しました。「Super Super」というタイトルは、すべての人が持つスーパーで特別な才能が発揮され、交流できる場が生まれることを願って名付けました。

互いの発表を観たり一緒に表現活動をしたりする中で出演者同士の交流が生まれること、公園や広場といった地域の人や通りすがりの人がふらっと立ち寄れるオープンスペースを会場として実施することで、今まで障害者の文化芸術活動に触れたことがない方々との出会いや価値の共有が生まれることを目指しました。



開催概要

● Super Super

開催日 2022年10月10日（月・祝）
場所 なぎさ公園屋外ステージ（大津市）
出演団体 太鼓とんとこ（和太鼓）
プラスワンエンジェルス（ダンス）
出演者数 37名



● パフォーマンス・ネットワークミーティング（2019～2022年度）

第1回	開催日 2019年9月30日（月） 場所 近江八幡市勤労者福祉センター 内容 活動に関する情報交換や意見交換 参加 12団体・個人
第2回	開催日 2019年12月9日（月） 場所 近江八幡市勤労者福祉センター 内容 活動に関する情報交換や意見交換 参加 7団体・個人
第3回	開催日 2020年10月13日（火） 場所 草津市立市民交流プラザ 内容 ①舞台芸術活動団体等の訪問調査に関する報告 ②活動資金の集め方についてのレクチャー ③発表と交流の場づくりについての意見後援 参加 8団体・個人

パフォーマンス・ネットワークミーティング 2022

日時：2022年6月27日（月）10:00～12:00
会場：キラエ草津 301会議室
〒525-0032 滋賀県草津市大島二丁目1番35号

障害のある人の舞台芸術活動団体の交流の場

2019年度より開催しているパフォーマンス・ネットワークミーティングは、連続で開催する障害のある人の舞台芸術活動の団体や個人が情報共有や意見交換をする交流の場です。

昨年開催したミーティングで出た意見を元にイベント内容も充実したおともだちひろっぱの開催に繋がりました。今年度も情報共有や活動についての意見交換を目的としたパフォーマンス・ネットワークミーティングを開催します。ぜひご参加下さい。

■お問い合わせ先
アート・プロジェクト・センター（社会福祉法人グロー）
〒521-1311 滋賀県草津市下野路4-637-2
TEL:0748-46-8118 FAX:0748-46-8228
Mail:artbutrinfo@glow.or.jp

発表と交流の場
「オンライン おともだちひろっぱ」
開催日 2021年2月28日（日）
内容 各団体の活動紹介動画のYoutube 配信
参加 8団体

第4回
開催日 2021年3月16日（火）
場所 滋賀県男女共同参画センター
内容 ①「オンライン おともだちひろっぱ」についての情報交換
②今後の取組についての意見交換
参加 7団体・個人

第5回
開催日 2021年6月28日（月）
場所 場所：草津市民総合交流センター
内容 ①舞台芸術に関する訪問調査についての報告
②今年度の各団体の活動についての情報交換
③今年度の展開についての意見交換
参加 7団体・個人

発表と交流の場
「ちっちゃなおともだちひろっぱ」
【北部会場】 葉草の里文化センター内グローブステージ（米原市）
開催日 2021年10月17日（日）
【南部会場】 とことんハウス いちえホール（大津市）
開催日 2021年11月28日（日）
場所 創作ワークショップと各団体の発表
参加 4団体（各2団体）

第6回
開催日 2022年6月27日（月）
場所 草津市民総合交流センター
内容 ①各団体の今年度の活動について
②芸術活動に関する訪問調査について報告
③「令和3年度 コラボちっちゃなおともだちひろっぱ」の報告
④今年度の取組に関する意見交換
参加 7団体・個人

発表と交流の場 「Super Super」 (p20)

* 2019、2020、2022年度：滋賀県障害者芸術文化活動支援センター事業として実施
* 2021年度：滋賀県障害者表現活動の地域拠点づくりモデル事業として実施

振り返り

今年度アイサで実施した「Super Super」は、パフォーマンス・ネットワークミーティング（以下、ミーティング）をきっかけに誕生した企画です。ミーティングは今から3年前（2019年9月）、当時アイサとしては課題であった舞台芸術活動に関するネットワークの構築を目指して立ち上げた交流の場です。活動の背景や経緯が異なる団体や個人が、個々の活動を通して得た知見や地域資源に関する情報を互いに交換し、交流することで、それぞれの活動の発展的展開へつながることを願ってのスタートでした。

当時は県内にどのような団体があってどのような活動が展開されているのかという全体像は把握できていませんでした。そこで翌年度からは「舞台芸術活動に関する訪問調査」（以下、調査）を実施、障害のある人の舞台表現活動を地域で展開・継続している団体や個人の生の声を聞き、活動の実態やニーズを把握することになりました。

ミーティングと調査の継続により、アイサは多くの人と直接出会いました。活動の形態や規模は様々ですが、指導者や活動資金の確保や家族や本人の高齢化等、活動を継続していくための共通の課題も見えてきました。

そしてコロナ禍。活動が制限される日々が続きました。WSは何とか継続しても、発表の機会は殆どなくなった時期に開催したミーティングでは、「オンラインを活用した発表の機会が持たないだろ

うか」という案が出され、それが2021年2月「オンライン おっともだちひろっぱ」企画へとつながりました。

翌年のミーティングでは、コロナ禍で活動しにくい状況が変わらず続いていましたが、「オンラインではなく人の反応や温かみを感じられる機会がほしい」との意見があがりました。そこで感染症対策を徹底し、参加者数を絞った「小さなおっともだちひろっぱ」を開催することになりました。今年度開催の「Super Super」も「関係者の間で閉じてきた取組を多くの人に知ってほしい」という意見から、これまでの取組が発展したものです。今まで出会う機会のなかった人と出会える会場を選びパフォーマンスを披露しました。ステージから少し離れた場所で楽しそうに様子を観ている中学生や、手拍子で一緒に盛り上がってくださった地域の人々等との素敵な時間を持つことができました。

「障害のある人が芸術文化活動に親しみながら地域で豊かにくらすためには、活動を支える個人や団体がつながり合うネットワークが重要です」…これは、2019年の初回ミーティング開催にあたり、企画の趣旨を説明するために記した文章の冒頭です。活動を続けてきた今は、「障害の有無に関わらず、人が地域で豊かに暮らすためのネットワーク形成が大事」だと強く思います。

発表と交流の場「Super Super」

7.

障害者の芸術活動に関する訪問調査



目的

2020年度より実施している訪問調査を、今年度も引き続き実施しました。これは、障害のある人の芸術活動を地域で展開・継続している団体や個人の活動に関する実態やニーズを把握するとともに、障害者の芸術文化活動に関するネットワークを広げるため、アイサのスタッフが活動の現場に出向き、担当者や関係者から直接お話を聞き取るものです。取組を始めた当初は舞台芸術活動団体を調査対象としていましたが、今年度からはその枠組みを広げ、分野を問わず、障害のある人の文化芸術活動に取り組む施設・団体・学校等を対象として実施することにしました。

調査によってアイサに届けられた声は、滋賀県の障害者芸術文化活動支援センターとして、これまで展開してきた事業を振り返る際も、これからの事業計画を立てる際にも貴重な情報であり、「私たちの事業がここに向かっていく」という道標になっています。

実施概要

調査内容 活動の実態／活動上の課題／新型コロナウイルス感染症の影響等
調査数 9団体（訪問調査8、電話調査1）

訪問先

- | | | |
|-------------------------|-----|----------------|
| ● 就労継続支援B型事業所イロハニトイロ | 大津市 | 2022年5月31日（火） |
| ● 滋賀県立三雲養護学校 | 湖南市 | 2022年6月8日（水） |
| ● 社会福祉法人にぎやか会にぎやか塾 | 草津市 | 2022年6月10日（金） |
| ● プラスワンエンジェルズ | 守山市 | 2022年6月12日（日） |
| ● 湖西高島「命の第九」を歌う会 | 高島市 | 2022年6月19日（日） |
| ● アートサポートたかしま | 高島市 | 2022年6月19日（日） |
| ● Borderless Dance | 甲賀市 | 2022年6月26日（日） |
| ● 障害児者通所支援施設おひさまハウス | 草津市 | 2022年10月14日（金） |
| ● 湖西の障がいのある人を応援するくれよんの会 | 高島市 | 電話での聞き取り |

8.

相談

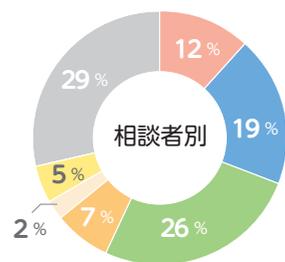


2022年度相談支援活動実績 (2022年4月1日～2023年2月28日)

相談件数 41件
相談回数 182回

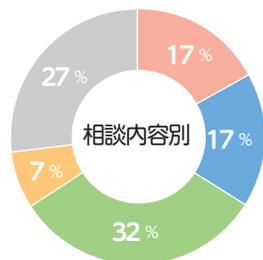
● 相談者別 (件数)

障害当事者	5
家族	8
障害福祉関係者 (障害福祉サービス事業者、当事者団体等)	11
芸術家・文化関係者等	3
市民団体 (サークル等)	1
自治体	2
その他 (企業他)	12



● 相談内容別 (件数)

創造 (創作環境、支援方法等)	7
発表 (発表したい、開催したい、依頼された)	7
権利保護 (二次利用・商品化・販売・作品の取扱全般)	13
情報発信 (取材、広報、見学)	3
その他	11



今年度は、2月28日時点で41件の相談活動を行いました。内訳でみると、障害福祉関係者、ついで障害当事者家族からの相談が多く、権利保護や発表の機会に関する相談が多いのは、ここ数年の傾向です。今年はその他に、障害当事者や家族からの「参加できる活動場所を探している」という相談や、福祉施設等からの「活動の講師を探している」というような相談など、創造の場についての情報を求める声も多く寄せられました。

今年度は、「様々な相談に対し、事例や地域資源

の情報を活用し、スタッフ間で共有しながら対応出来る環境をつくる」ことを目指しました。昨年度に続き、活用しやすいよう相談事例や地域資源等の情報整理を進めたほか、ホームページへ掲載する新着情報をスタッフ間で共有し、相談者のニーズ合わせた情報提供を行いました。定期的に情報や相談状況を共有する機会を持ち、また、事例検討会や勉強会を行うなどスタッフのスキルアップを図りながら、寄せられる相談に対応していきたいと考えています。

9.

情報発信



ホームページ、メールニュースでの情報発信 (2022年4月1日～2023年2月28日)

● ホームページ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
記事数	12	10	19	16	10	11	16	14	13	4	6	131
アクセス数	1347	1342	1949	2086	1776	1863	1887	1998	1639	1260	1729	18876

● 掲載記事 (カテゴリ別)

アイサからのお知らせ	15
イベント・展覧会情報	72
公募情報	30
助成金情報	4
研修・調査等レポート	10
計	131

● メールニュース：1回/月



アイサウェブサイト

今年度もアイサに届くイベントや公募情報、各関係団体から掲載依頼のあった情報などをホームページで発信しました。毎月一定数のアクセス数があることから、定期的な情報発信がアイサのホームページの活用につながっているのではないかと思います。活用例として、掲載依頼のあった団体から「アイサホームページに掲載された情報を見て公募展に応募してこられた方がおられた」という報告を聞くことができました。また、相談支援において、発表の機会についての相談が寄せられた場合に、その時点では案内できる公募展等がなくても、ホームページを活用いただけることを案内してきました。相談のきっかけとして、情報検索をする中でアイサのホームページを知り相談につながった例もありました。

メールニュースでは、事業でつながった個人・団体等へ月に1回程度、アイサの研修やイベント案内を配信しました。

ホームページ等だけでなく、それらへのアクセスが難しい人へ情報を届ける工夫も必要です。これまでの事業でつながった個々の団体や個人へ直接声かけすることで、イベント等の参加につながることも多いことから、日頃からのつながりを大切に丁寧な声かけしていくことも重要な情報発信の一つと考えています。

今後も、より多くの方に必要な情報が届けられるように、様々な媒体を取り入れながら、情報発信を継続していきます。

10.

協力委員会



アイサでは協力委員会を設置し、滋賀県障害者芸術文化活動支援センターの実施事業について助言をいただいています。今年度は教育、文化、福祉等の分野から7名が委員を務めてくださいました。委員会では、事業計画や評価指標に対する意見交換と、実施した事業の評価を行っています。また、今後のアイサの役割に期待することや方向性に関するご意見もいただき、長期的な視点でアイサのあり方を更新していくために欠かせない場となっています。

2022 年度協力委員

- 岩原勇氣（特定非営利活動法人 BRAH=art.）
- 遠藤恵子（特定非営利活動法人 まちづくりスポット大津）
- 大塚ひろみ（彦愛犬地域障害者生活支援センター ステップアップ21）
- 白崎清史（公益財団法人びわ湖芸術文化財団 滋賀県立文化産業交流会館）
- 細谷亜紀子（野洲市立篠原小学校）
- 美濃部裕通（NPO 法人 CIL だんない）
- 宮本ルリ子（世界にひとつの宝物づくり実行委員会）

実施概要

第1回 2022年6月21日（火） オンライン開催

第2回 2023年2月28日（火） 場所：G-NETしが男女共同参画センター 研修室A

COMMENT

協力委員コメント

細谷亜紀子さん

野洲市立篠原小学校 校長

協力委員を務める中で感じること

近江八幡市の風情のある建物で、子どもたちや利用者さんの作品をどのように掲示すべきか、作品が生きるかを議論されている様子を拝見させていただきました。夜の時間帯でしたが、経験のある方を中心に熱心に議論されていて感激しました。一つ一つの技術が新しい方に引き継がれていく一端を見せていただいたように思います。また、持参された作品のダイナミックさ、面白さにも魅了されました。これらの作品に向かっているときの子どもや利用者さんの表情までが伝わってくるような気がしましたし、参加者の方から語られる言葉に、製作者への温かい思いが伝わってもきました。今は、まだまだ「障害のある方の作品展」になってしまいがちですが、これからの時代は障害の有無にかかわらず、作品展ができ、みなで楽しめるようになっていくといいなあ、その時には是非、今回の参加者の皆さんに中心になっていただくいいなとも思います。かつて国枝慎吾さんが「多様性、多様性とあえて強調しなくて良い社会になっていくといいですね」というようなことをおっしゃっていたことを聞きましたが、そうした社会づくりの中核に『アイサ』があることを期待しています。

美濃部裕道さん

NPO 法人 CIL だんない 代表

アイサの協力委員にならないかという依頼があったとき、受けるかを迷いました。アール・ブリュットが個人的にあまり好きではないからです。もっと言葉を選ばずに言えば、嫌いでした。しかし、担当の方にそれを伝えて、「何を言い出すかわかりませんが、いいのですか？」と聞いたところ、それでも構わないということだったので、お受けした次第です。

それから自分はアール・ブリュットの何が嫌いなのかを考えてみました。大きく2つありました。一つは、地域・社会の環境や障壁への意識があまり感じられないこと。もう一つは、当事者に関わる人々がバタナリズム（保護的）に感じてしまうこと。このように自分なりに分析しているところです。

その中で、私がアイサに期待することは、この2つの私の感じるアール・ブリュットについての嫌悪感を一つ一つ、少しずつ取り除いてもらうことです。それが完遂すれば、アール・ブリュットが真の共生社会の実現のための重要なピースの一つとなり得るでしょう。そのためにも、「障害の社会モデル」、「インクルーシブ」、「当事者参画」の3つのキーワードが重んじられるアイサ協力委員会の運営を期待してやみません。

岩原勇氣さん

NPO 法人 BRAH = art. 理事長

ブラフアートとして、アイサの取り組みに関わらせていただき3年がたちます。新型コロナウイルス感染症の拡がりや時を同じくして、命を守ることが最優先とされ、文化芸術に触れる発する機会が、著しく制限される中、表現する事について改めて考えさせられる三年間でした。

インターネットを使用した発表会の開催や、これまでと変わらず様々な分野からの障がいがある方の表現活動に関わるアクセスを増やすワークショップの開催などの活動は、障がいがある方に直接的に関わることが制限される社会において、理解の土壌を耕すよい時間になったのではないのでしょうか。

人と人との関係性がより希薄になったと言われる方もおられるかもしれませんが、ネット社会が急激に広がったことで、世界中の様々な表現を享受したり、発信したりすることによりアクセスしやすくなったことは、アイサでの取り組みが広がるための追い風になるような気がしています。

NFT（※）を使ったアート作品の保護なども広がる中、今後も障がいがある人もない人も、たくさんの方の様々な表現活動が、アイサの取り組みを通じて、広がってくれることを願っております。

※ NFT…Non Fungible Token（ノンファンジブルトークン）。日本語では「代替不可トークン」や「非代替性トークン」と説明されます。

大塚ひろみさん

湖東地域障害者自立支援協議会
彦愛犬障害者生活支援センター
ステップアップ21 相談支援専門員

令和3年度よりアイサ協力委員として就任しております。ステップアップ21の生活介護では、創作活動として陶芸作品に力をいれていて、「これいいな・好きだな」と感じる作品も多くあります。

美術作品や工芸作品を見る・触れる際に「これいいな・好きだな」と思う感覚は「人それぞれ」だと思います。その感覚は自由ですよね。個人において本当に心動かされた作品については、手にいれたい・触れたいと思うでしょうし、その時点で価値が生まれるし、その価値に応じた対価も発生するのだと思います。

その価値について、誰が作ったのかというカテゴリーは存在していません。誰が作った等ではなく、芸術的センスや才能、その価値がシンプルに認められる社会であって欲しいと強く思います。障害がある人が描いた・作ったという部分を強調するような表現は個人的には好きではありません。アイサには、そのセンス・才能・価値について、生かしたい・見てもらいたいと希望する方・その支援者等を応援することが求められているのだと思います。委員として私に出来ることがあるとすれば、その点ではないかと感じております。

遠藤恵子さん

特定非営利活動法人
まちづくりスポット大津 理事

アイサの協力委員になって増えた関心

一昨年より協力委員となり、一気にアートという世界が広がりました。

今、障害者のアートは全国で広がって目にする機会も増えました。先日、全国まちスポ交流会の分科会のテーマが「障害がある人の表現活動のディレクション、ワークショップ『アートは誰のもの』」でした。アートディレクターの中津川浩章さんとやまなみ工房の山下完和さんから障害者アートについてのお話を聞き、「アートにはいろんな人に幸せをもっていく力がある」「表現するプロセスに感動する」と言われたことが納得でした。ちょうどこの時期、障害者アートの作品展示をランチ茅ヶ崎の展示場で開催されていました。

私どものまちづくりスポットでも、園内の木々に飾るヤーンボミングという事業では、今回も昨年と同じく、NPO 法人 BRAH=art. さんで作られた織物も木に巻き付けて飾ってもらいました。また、子ども向けのポンポンづくりをワークショップで行い、特別支援学級の子どもたちも含め飾り付けをしました。作るだけでなく、披露できる場があることは、誰にとっても励みになることだと思います。

滋賀県では常設のアートギャラリーがあり、ぜひいたく空間があり、またこの事業に関わる事業所の皆さんの献身的な努力を見るにつけ、大切にしたい事業です。障害者のアートだけでなく、身近な暮らしの場に広がるアートをどのように社会に根付かせるのか、アイサがそういう役割を担えることを願っています。

白崎清史さん

(公財) びわ湖芸術文化財団
滋賀県立文化産業交流会館

令和4年度障害者芸術文化活動支援センター 協力委員を務める中で感じること、アイサへ期待すること

協力委員では、舞台芸術および文化施設に係る者として微力ながら関わらせていただきました。

最初の委員会で配られた資料を見た時、早くから全国に先駆けて支援の仕組みを整えられてこられた事もあり、ひとくちに支援と言っても多彩な取り組みにより、個人・団体を問わず、障害のある人の芸術活動を幅広く支えておられるなどという印象を受けました。

支援センターの事業計画では、より多くの障害者が社会参画できることを目的に、創作活動、発表・参加の場、現場で働く人等のニーズを細分化し、それぞれに具体的な目標が設定されています。その目標に対する達成度を数値化することが困難であるため、丁寧な意見交換や聞き取りが必要となり、協力委員会でも全ての事業の成果を共有し確認していきます。

各委員から様々な視点からの意見が出され圧倒されますが、自分の仕事にも置き換えられるヒントや課題もあり、非常に刺激を受けています。

現在は福祉や芸術文化に関わるメンバーで構成された委員会ですが、今後は他の分野からもご参画いただき、様々な場面で障害者の活動の支援体制が整えられ、社会参画の場がもっと広がればと思います。

宮本ルリ子さん

世界にひとつの宝物づくり実行委員会

協力員として私は芸術文化活動支援のためのプログラム、「作品の魅力を生かす展示とは」の研修会の視察をさせていただきました。

4回講座のひとつ「展覧会のプロセスを知ろう」のワークショップでは、学芸員がファシリテーター（コミュニケーションの交通整理役）となり、展覧会を企画する参加者は鑑賞者になることから始まりました。作品の中には何を表現しようとしているのか謎めているものもあります。学芸員の誘導のもと、参加者はグループ毎にコミュニケーションを取りながら作品と深く向き合い、感想や印象を互いに受け止め、共有しました。この鑑賞体験をもとに作家・作品紹介を検討しました。そして、展示では何を伝えたいのかを探り、チラシに反映させることを考える活動でした。

後日、温かみのある自由な雰囲気が伝わる展覧会案内のチラシを拝見しました。実際の展示はシンプルな構成となっていて、作品が際立っていました。参加者同士で話し合っただけでよかった、見るものに響く紹介文もありました。創作者の個性が引き出され、その個性の輝きがしっかりと伝えられていました。

アイサの活動は、丁寧に障がい者やその周辺の人たちに寄り添っています。今回の研修会は周辺の人たちが主な参加者でしたが、作品を通して作者への理解とつながりが生まれていました。今後もこのようなさまざまな角度の活動が継続されることを願っております。

1年を終えて

一つ一つの取り組みを計画する際、誰に向けた、どんなことを目指した取り組みなのかを意識しながら検討してきました。こんな声があったな、このことはまずあの人に相談してみよう、と検討する中で思い浮かぶ顔もあったように思います。例えば今年の展示研修成果展示では、以前相談があった方、アイサの取り組みに参加された方に作品をお借りし、実施しました。これまでの取り組みでの出会いが新たな取り組みにつながったことは、大きな成果だと感じています。

今年は特に、私たちが様々な人とつながるだけでなく、私たちの事業が参加者や関係者の交流の場になることを重視し、取り組みの中に意見交換やグループワークの時間を取り入れながら事業を実施しました。展示研修やing展実行委員会などは複数回開催されることもあり、回を重ねるごとに、参加者同士の交流する場が活動時間外でも見られました。このように人と人がつながる機会をつくるのが、ネットワークを形成し、新たな展開へ発展することにつながると考えています。また展示研修のアンケートにおいて、「みんなで話し合うことはよい展覧会を作るうえでとても大事だと感じた」「展示に際して他者の視点を意識的に取り入れることが重要となる」という意見も聞かれました。その場が情報交換や新たな学び、出会いにつながっただけでなく、それぞれの現場で取り組む際にもこのような機会を取り入れることが大切だという学びにもなったのではと感じています。

アイサは今年、開設から10年の節目を迎えました。この10年の間に、障害のある人の芸術文化活動を取り巻く状況は大きく変わってきました。国内外で障害のある人の作品が発信され、その魅力が広く周知されてきました。また、当初は全国に数か所しかなかった支援センターも現在は40都府県に設置され、障害のある人の文化芸術活動を支援する体制も整えられています。それに伴い、アイサが求められる役割も年々変化していると感じています。

これまでたくさんの人と出会い、たくさんの協力を得ながら、様々な取り組みを実施してきました。これまでの出会いやノウハウをもとに、そして、これからも人と人とのつながりを大切にしながら、様々なニーズに応える取り組みを重ねていきたいと思っています。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

令和4年度アイサ事業報告書

2023年3月31日発行

[制作・発行]

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
法人事務局芸術文化部
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2
TEL 0748-46-8118 FAX 0748-46-8228
E-mail artbrut_info@glow.or.jp
WEB <http://info.art-brut.jp>

[発行責任者]

牛谷正人（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

[執筆]

松井裕紀、山口有子、藤田爽乃、橋本悦子、井上敬子
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局芸術文化部）

[編集]

辻並麻由

[デザイン]

上川七菜

[表紙掲載作品]

「へいわなせかい」 あん

[助成]

令和4年度障害者芸術文化活動支援センター
運営費補助金（滋賀県）